

女三の宮の降嫁（導入指導メモ）

○この教材から第二部に入り、登場人物の心理を読みとることが学習目標となるが、生徒にとっては、第一部からの「あらすじ」面でのギャップに加え、第一部とのテーマ（世界観？）の違いによるギャップも感じられるはずである。そこで、登場人物の心理の理解を目指す上では、登場人物たちの置かれている状況などを丁寧に読み取るための、有効な発問を重ねてゆくことが必要となる。

<本文>

三日がほどは夜離れなく渡り給ふを、年ごろさも慣らひ給はぬ心地に、忍ぶれど、なほものあはれなり。御衣どもなど、いよいよ薫き染めさせ給ふものから、うち眺めてものし給ふ気色、いみじくうたげにをかし。などて、よろづのことありとも、また人をば並べて見るべきぞ、あだあだしく心弱くなり置きにけるわが怠りに、かかることも出で来るぞかし、若けれど、中納言をばえ思しかけずなりぬめりしをと、我ながらつらく思し続けらるるに、涙ぐまれて、「今宵ばかりは、理と許し給ひてむな。これより後のとだえあらむこそ、身ながらも心づきなかるべけれ。また、さりとて、かの院に聞こしめさむことよ。」と思ひ乱れ給へる御心の内苦しげなり。少しほほ笑みて、「みづからの御心ながらだに、え定め給ふまじかなるを、まして、理も何も。いつこにとまるべきにか。」と、言ふ効なげにとりなし給へば、恥づかしうさへおぼえ給ひて、頬杖をつき給ひて寄り臥し給へれば、硯を引き寄せて、

目に近く移れば変はる世の中を行く末遠く頼みけるかな
古言など書きまぜ給ふを取りて見給ひて、はかなき言なれど、げにと理にて、

命こそ絶ゆとも絶えめ定めなき世の常ならぬ仲の契りを
とみにもえ渡り給はぬを、「いとかたはらいたきわざかな。」とそそのかし聞こえ給へば、なよよかにをかしきほどにえならず匂ひて渡り給ふを見出だし給ふも、いとただにはあらずかし。

<本文分析>

- ①（S ）三日がほどは夜離れなく（誰ノトコロニ ）渡り給ふを、
（S ）年ごろさも慣らひ給はぬ心地に、忍ぶれど、なほものあはれなり。
- ②（S ）御衣どもなど、いよいよ薫き染めさせ給ふものから、
うち眺めてものし給ふ気色、いみじくうたげにをかし。
- ③（S ）などて、よろづのことありとも、また人をば（誰ニ ）並べて見るべきぞ、
あだあだしく心弱くなり置きにけるわが怠りに、かかることも出で来るぞかし、
（S ）若けれど、
（S ）中納言をばえ思しかけずなりぬめりしをと、我ながらつらく思し続けらるるに、
涙ぐまれて、

「今宵ばかりは、理と許し給ひてむな。

これより後のとだえあらむこそ、身ながらも心づきなかるべけれ。

また、さりとて、**かの院**に聞こしめさむことよ。」と思ひ乱れ給へる御心の内苦しげなり。

④ (S) 少しほほ笑みて、

「(S) みづからの御心ながらだに、え定め給ふまじかなる**を**、

(S) まして、理も何も。

いづこにとまるべきにか。」と、言ふ効なげにとりなし給へ**ば**、

(S) 恥づかしうさへおぼえ給ひて、頬杖をつき給ひて寄り臥し給へれ**ば**、

(S) 硯を引き寄せて、

目に近く移れば変はる世の中を行く末遠く頼みけるかな

⑤ 古言など書きませ給ふを (S) 取りて見給ひて、はかなき言なれ**ど**、

げに**と**理にて、

命こそ絶ゆとも絶えめ定めなき世の常ならぬ仲の契りを

(S) とみにもえ渡り給はぬ**を**、

(S) 「いとかたはらいたきわざかな。」とそそのかし聞こえ給へ**ば**、

(S) なよよかにをかしきほどにえならず匂ひて渡り給ふを

(S) 見出だし給ふも、いとただにはあらずかし。

<背景説明のポイント>

- 1 第一部とはうって変わって暗い話題（朱雀院の病気）から第二部が始まる。
- 2 第一部では言及されなかった女三の宮が登場する。
→新たなテーマを担って登場してきた（紫式部が新たなテーマを展開するために造形した）人物であることが分かる。
- 3 源氏が女三の宮の降嫁を受け入れた理由。
 - ①藤壺の姪であること（←「あだあだしく」）
*血のつながり神秘的な意義を感じる感性があった
 - ②朱雀帝のたつての願いであること（←「心弱くなり置きにける」）
 - ③朱雀帝の財産を引き継ぐ存在であること（西の「二の対」増設）
- 4 女三の宮は紫の上よりも身分が高く、源氏の正妻と目されることになる。

<読解のポイント> （* Tは解説、Qは発問例）

0 <本文>の傍線部の主語を確認する。

1 「三日ほどは夜離れなく ～～ あはれなり。」

T 1 正式な結婚の習慣の確認。

T 2 「葵の上」「紫の上」と「明石の君」の説明。

*かつて「明石の上」と呼ばれた（それだけ源氏物語には「明石物語」としても面があるともいえる）が、本文で「上」とは表現されておらず、現在では「明石の君」

とする。そこに「紫の上」との違いがある。

*紫の上にとって、源氏が他に正式に妻を迎えたという経験はない。源氏が明石の君と結婚した際には、紫の上は都で二条の屋敷をまもっていたのであり、結婚の事実を知るのは、源氏からの便りによって間接的にである。つまり「三日ほどは夜離れなく」の経験が紫の上にはないのである。

T 3 紫の上は、女三の宮の輿入れにと伴い、六条院春の町の寝殿から東の対に移り、「対の上」と呼ばれるようになった。

Q 1 「さも慣らひ給はぬ」の「さ」が指す内容は？

→源氏が、三日間連続して同じ女性のもとに通っていくこと。

●紫の上の精神的な痛手は相当なものであったと考えられる。

2 「御衣どもなど ～～ らうたげにをかし。」

Q 1 助動詞はどれか？

→「させ」＝使役

Q 2 誰の「御衣」か？ 誰が、誰に「薰き染めさせ」か？

→源氏の御衣 紫の上が女房たちに

Q 3 紫の上は新しい妻のもとに出かける源氏に協力的か否か？

→協力的

Q 4 なぜ協力的なのか？

Q 4 a 世間の人、どのような紫の上の心情・ふるまいを予想（期待）しているか？

→女三の宮（源氏）と対立する

Q 4 b そういう世間に対して、紫の上はどう振る舞おうとしたのか？

→世間の思惑通りにはなりたくない

Q 4 c 紫の上の本当の心情が伺われる行動は？

→「うち眺めてものし給ふ」（直前に「ものから」逆接）

Q 5 そのような紫の上に対する源氏の評価は？

→「いみじくらうたげにをかし」

Q 6 一方、2日間を過ごした源氏の女三の宮に対する評価はどうだったと想像されるか？

→ガッカリした。

*本文では「姫宮は、げにまだ小さく片なりにおはする中にも、いといはけなき気色して、ひたみちに若び給へり」とある。肉体的にも精神的にもただただ子どもであったということ。

T 1 期待が大きかっただけに、源氏は女三の宮の幼さに落胆する。

Q 7 源氏が関わった年若い女性といえば？

→紫の上

T 2 小さい頃の紫の上の聡明さを見知っているだけに、比較を通してより落胆が深まるのであり、また、逆に、小さい時から聡明であり、今また大人の対応をする紫の上に対する思いが高まるのである。

●女三の宮を手に入れることで、逆に紫の上の存在の大きさを確認することになる。

3 「などで ～～ 見るべきぞ。」

★「などで ～～ なりぬめりしを」が源氏の心内語であることを、「、」などに注目して明らかにしておく。

Q 1 誰に、誰を「並べて」か？

→紫の上に、女三の宮を。

Q 2 「べき」の意味は？

→可能（*打消、反語表現とともに用いられた場合。「などで」は反語）

4 「あだあたしく ～～ 出で来るぞかし。」

Q 1 「あだあだし」は、教科書のあらすじのどの部分に対応するか？

→「宮が亡き藤壺の宮の姪であるということもあり」

Q 2 「心弱くなり置きにける」は、教科書のあらすじのどの部分に対応するか？

→「結局、宮との結婚を承諾する」

5 「若けれど ～～ なりぬめりしを。」

Q 1 助動詞は？

→「ず（打消）」「ぬ（強意）」「めり（推定）」「し（過去）」

Q 2 「思しかけず」の主語は？

→かの院（朱雀院）（*心内語で尊敬語が使われている）

Q 3 「若けれど」は誰がか？

→中納言（夕霧）

Q 4 「思しかけず」とは、朱雀院が中納言を何に「思しかけず」なのか？

→女三の宮の婿の候補として。

●満足できなかった女三の宮は、息子の夕霧にこそふさわしいという父親…

6 「我ながら ～～ 涙ぐまれて」

Q 1 助動詞は？

→「らるる」「れ」=ともに自発。

Q 2 「思し続けらるるに」の「に」で主語は変わったか？

→変わっていない

7 「今宵ばかり ～～ 聞こし召さむことよ」と ～～ 苦しげなり。

Q 1 「許し給ひてむな」「とだえあらむこそ」「聞こし召さむことよ」文法的意味は？

→勧誘 仮定 婉曲

Q 2 「理」とは、ここではどういう意味か？

→世間で決まっていること（結婚のしきたり）

Q 3 院はどのようなことを「聞こし召さむ」というのか？

→源氏が自分の期待に反して女三の宮を大切にしていないということ。

●紫の上を大切にしたいが、そうすると朱雀院の期待を裏切ることになる。一方、朱雀院の期待に応えようとすると、紫の上を裏切ることになる。このようなダブルバインド

な状態に置かれている。

8 少しほほえみて「みづからの ～～ 」と ～～ とりなし給へば

Q 1 「え定め給ふまじかなるを」で、源氏は何と何とで決められないのか？

→紫の上への愛情をとるか、朱雀院からの信頼をとるか

Q 2 「理」とは、紫の上はどういう意味で使っているのか？

→人間としての正しい判断

9 恥づかしうさへ ～～ 寄り臥し給へれば

Q 1 何に「寄り臥し」たのか？

→脇息

10 硯を引き寄せて 目に近く ～～ 書きませ給ふを

Q 1 「目に近く～」の歌の句切れは？

→句切れなし

Q 2 他の修辞は？

→なし

Q 3 なにがイイタイのか？

→時間の経過とともに愛情は変化してしまった

* 相手を責めるのではなく、運命的なものとして受け入れている

Q 4 「目に近く」の歌はどう評価されているか？

→はかなき言＝何気ない歌 (*ここでは「こと」が「言」で「歌」の意)

11 取りて見給ひて ～～ 命こそ ～～ 仲の契りを

Q 1 「理」とは、ここではどういう意味か？

→もつともである

Q 2 「命こそ～」の歌の句切れは？

→二句切れ

* 「とも」は、事実を仮定的に表現して強調する用法

Q 3 なにがイイタイのか？

→無常なこの世とは異なり、二人の愛は永遠に変わらない

Q 4 この歌に対する紫の上の反応が書かれていないことから、どのようなことが想像されるか？

→二人の心が通い合っていないこと

Q 5 紫の上の歌に比べてどのような印象をもつか？

→力が入りすぎていてウソくさい

* 強い係り結びによる二句切れや、「とも」の使い方、「定めなき世」「世の常ならぬ」「契り」といった大袈裟な言葉のオンパレード

● 一見贈答が成り立っているように見えるが、紫の上は古歌に紛らわせて書き付けただけであり、源氏の歌に対する反応もなく、二人の隔たりが象徴されている。

12 とみにもえ渡り給はぬを

Q 1 なぜ「とみにもえ渡り給はぬ」なのか？

→あれだけ大袈裟な歌を詠んだから

→紫の上との心の溝が埋まらないから

13 「いとかたはらいたき ～～」とそそのかし聞こえ給へば

Q 1 誰が、誰に、何を「そそのかし」たのか？

→紫の上が、源氏に、女三の宮の元に行くことを。

Q 2 「いとかたはらいたきわざかな」とあるが、a 誰の、b どのような態度が、c 誰にとって、d なぜ「かたはらいらきわざ」なのか。

→源氏の、いつまでも女三の宮の元に出かけない態度が、紫の上にとっては、自分が源氏を女三の宮の元に行かせないように引き留めていると周囲から誤解されかねない状況を生み出す、いたたまれない行為になっているから。

●源氏が紫の上との心の交流を回復しようとする場にとどまれば、それがかえって紫の上の心情を傷つけることになる。また、紫の上は紫の上で、源氏にいてもらい気持ちがありながら、周囲のことを考えると源氏を「そそのか」さずをえず、また、「そそのか」さなければ、源氏が女三の宮の元に出かけにくいことも察して、自ら「かたはらいたきことかな」と語りかけなければならないのである。

●他を立てればもう一方が立たないという状況ではあるが、「今宵ばかりは～」の発言では、「他」と「他」が別のもので、つまり、紫の上と朱雀院であったが、ここでは、「他」と「他」が同じもので、つまり、紫の上を気持ちを大切にしようとする、それが紫の上の気持ちを傷つけることになってしまうという状況が示されている。そこに源氏物語第二部の主題の深まりが読み取れる。

14 なよよかに ～～ いとただにはあらずかし。

Q 1 「なよよかに～句ひて」とは何のことか？

→源氏の衣装

Q 2 「いとただにはあらずかし」とは、誰の、どのような心情か？

→紫の上の、悲しみを必死に押し殺している心情